

備えあれば 憂いなし

脳梗塞編

日本人の死因4位である脳卒中の中で最も多い脳梗塞。脳卒中の診療に詳しい吉本幸生先生に予防と対処法をうかがいました。

顔のしびれなどの前兆を見逃さず、すぐに受診

脳梗塞は、脳の血管が詰まることで起こる疾患です。脳に酸素や栄養が行き渡らなくなり、脳細胞が破壊されてしまうことから、体の麻痺や言語障害などが現れます。脳へのダメージが大きいと、後遺症が残ったり寝たきりになる場合や、死に至ることも。吉本先生は「対処が早いほど、治療の効果が上がります。そのためにも前兆を見逃さず、脳梗塞が疑われる場合は、すぐに専門診療科を急ぎ診して欲しい」と強調します。

血管の詰まりが起きている脳

PROFILE

西村内科脳神経外科病院長(熊本県)
吉本幸生先生

よしもと・ゆきお 1985年熊本大学医学部卒業。同大学医学部放射線科入局後、熊本赤十字病院勤務を経て88年西村内科脳神経外科病院長勤務。93年同病院副院長就任、2006年より現職。日本感染症学会ICD(感染症コントロールドクター)認定医。



脳疾患の救急患者を受け入れている西村内科脳神経外科病院。



の場所によって現れる症状は様々ですが、脳梗塞の前兆には顔のしびれや麻痺、手足の動きの異常、目のかすみなどがあります。いずれも体の片側だけに症状が出るのが特徴です。またこうした症状が発症しても、15分程度でその症状が完全に消失する「一過性脳虚血発作」が起こることもあります。その場合、次に本格的な脳梗塞を発症する

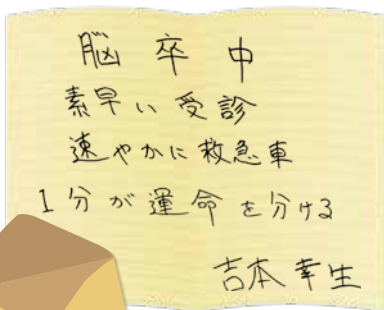
確率が高いため、症状が消えても安心せず、受診することが大切です。

**生活習慣病の改善と検査で
脳梗塞の発症を防ぐ**

脳梗塞は、脳出血やくも膜下出血と共に脳卒中(脳血管障害)の一つです。1970年代頃まで最も多かった脳出血に代わり、近年は脳梗塞が脳卒中の約7割を占めています。背景には、糖

尿病や脂質異常症など、動脈硬化を招く生活習慣病の増加があります。「特にメタボリックシンドロームの人は、血糖値や中性脂肪の数値が少し高いだけでも脳梗塞のリスクが高くなると言われています。予防には、まず専門医を受診して体の状態を知り、こうした危険因子を治療で改善することが必要です」。

その他にも、MRI(磁気共鳴画像)や首の頸動脈エコー検査で、動脈硬化をチェックすると、脳梗塞を起こしそうな血管や、症状が出ない、隠れ脳梗塞を見つけることができます。吉本先生は「日頃の健康管理と合わせ、定期的な検査によって脳梗塞を防ぐことを心がけましょう」とアドバイスしてくださいました。


画像診断の腕を治療に活かす

西村内科脳神経外科病院に勤務して約30年になる吉本先生。専門は放射線科の画像診断ですが、患者さんを直接診る医療をしたいと思い、同病院に赴任したそうです。「画像診断の技術を活かせる上、地域の医療に力を入れて

いるところが魅力的でした」。現在も脳疾患の救急患者や再発予防の患者さんを幅広く診療。「発症後、患者さんがどのような生活や社会復帰を望んでいるかを重視し、オーダーメイドの治療を心がけています」と笑顔で語ってくださいました。



左:隠れ脳梗塞の発見にも役立つMRI。右:脳をはじめとする体の疾患の早期発見に、画像診断を活用する吉本先生。